

2024 年度後期 START プログラム 事後レポート

所属学部・学科・学年	法学部・法学科・1 年
(1) START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか	
START プログラムを通じて、日本とアメリカの授業スタイルの違い、仕事に対する考え方の違い、そして自身の英語力の課題を実感した。アメリカの授業では一つの議題に対して生徒の意見や感想を積極的に求める形式が多く、日本のように講義を聞く受動的な学習とは大きく異なっていた。このスタイルは学びを深めるだけでなく、批判的思考を養う機会にもなった。また、仕事に対する考え方にも大きな違いがあり、日本では仕事の集中や低姿勢な接客が重視されるのに対し、アメリカでは仕事を生活の一部として捉え、店員同士やお客さんともフレンドリーに接するスタイルが一般的だった。リラックスした雰囲気の中で効率よく働く姿勢を学んだ。さらに、実際に英語圏で 10 日間過ごす中で自分のスピーキング力の未熟さを痛感した。これまで義務教育の中で学んだ英語力は十分だと考えていたが、実際の会話では言いたいことを瞬時に英語に変換できず、浅い返答しかできない場面が多くあり、悔しい思いをした。 これらの経験を今後活かすには、まず、ディスカッションやプレゼンテーションの機会を増やし、積極的に意見を述べる力を養いたいと考えている。また、日本とアメリカの仕事文化の違いを理解したことで、異文化に適応する柔軟な考え方を身につけることの重要性を実感したため、今後は多様な価値観を尊重しながら行動したいと思う。そして、英語力の向上に向けて、単語や文法の暗記にとどまらず、日常会話スピードのリスニングやスピーキング練習を中心に学習を進めていきたいと強く思う。これらの取り組みを通じて、今回の経験をより実りあるものにし、自分自身の成長につなげていきたいと考える。	
(2) プログラム内容についての全体的な感想	
START プログラム全体を通じて、多様な授業内容や自由時間の充実、そして異文化体験の機会が豊富にあったことが非常に印象的であった。授業では先住民の歴史や天文学、水資源問題、VR を活用した新しい授業スタイルなど、特定の分野に偏ることなく幅広いテーマを学ぶことができた。こうした多様な学びを通じて異なる視点から物事を考える力を養うことができ、新たな知見を得る貴重な機会となった。 また、自由時間が多かったことで授業だけではわからないアメリカの文化や街の雰囲気、人々とのつながりを実感することができた。授業が終わるのは基本的に午後 5 時で、その後 3~4 時間の自由時間があったため、テンピの街を散策したり、山に登ったり、気になっていたお店を訪れたりなど現地の生活を自分の目で見て体験することができた。このような実践的な経験が、単なる座学以上に深い学びとなったと感じている。 しかし一方で、現地の学生と関わる機会がもう少しあれば、さらに充実したプログラム	

になったのではないかと感じた。授業はすべて START プログラムの参加者のみで構成されていたため、現地の学生と直接ディスカッションをする機会がほとんどなく、現地の大学生がどのように学び、どのような価値観を持っているのかを知る機会が少なかった点はやや物足りなさを感じた。

(3) 今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス

START プログラムは、英語力の向上を目的としたものではなく、世界を知ることによって主眼を置いた短期留学プログラムであると私は考えます。今回実際に参加してみて、私は自身の英語力の低さに直面し、大きな挫折を感じました。しかし、その経験が英語学習へのモチベーションを飛躍的に高めるきっかけにもなりました。また、大学生のうちに海外で生活することで、日本とは異なる文化や価値観を実際に体験することができます。このような経験は、今後のキャリア形成においても大きな影響を与えると考えます。異文化の中で生活し、さまざまな人と交流することは、視野を広げるだけでなく、自分自身の適応力やコミュニケーション能力を高める機会にもなると考えます。

これから START プログラムに参加する学生には、ぜひ、世界の広さや文化・環境の違い、そして現地の絶景を存分に感じてほしいです。そして、それを自身の人生にとって貴重な経験として活かしてほしいと思います。さらに、プログラム参加が決まった際には、スピーキングを中心とした英語学習に重点を置くことを強く勧めます。私自身、スピーキング力が不足していたことで悔しい思いをしたため、実際に現地でのコミュニケーションを円滑にするためにも、事前に十分な準備をしておくことが重要です。

2024 年度後期 START プログラム 事後レポート

所属学部・学科・学年	文学部・人文学科・1 年
------------	--------------

(1) START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか

今回の留学を通して学んだことは山ほどあった。日本とアメリカの大学生との違いや私の英語力の未熟さ、また分野横断的に勉強することの大切さなど、挙げるとキリがない。しかしここでは、私が今回の留学で最も大きな学びだと思えた一つを記述する。それは、「人文科学を学ぶ意義」についてである。

広島大学文学部に所属する私は、これまで大学生活を送る中で感じていた疑問があった。それは「文学部で学ぶことは社会のどこに役立つのか?」「人文科学を勉強したところで就職に使えるのか?」といった人文科学を勉強する意味についてである。一時は、転学部すら考えていたほど、何のために人文科学を学ぶのかについて迷走していたこともあった。しかし、今回のアメリカ留学を通して、この問いに対する答えが見えてきたように思う。

Dr. Andrew Maynard による The future of Being Human という授業を受けた時のことである。彼は講義の序盤、現代社会におけるテクノロジーの急速的な発展について紹介してくれた。例えば、Neuralink Corp. というイーロンマスクが設立したニューロテクノロジー企業は、独自開発している脳インプラントによって人の脳とコンピューターとを接続しようと臨床試験等を行っていると教えてくれた。また、2024.7.19 に発生した CrowdStrike outage という大規模なシステム障害についても教わった。これにより、世界中の空港や鉄道システム、銀行、医療機関などで混乱が生じたようだ。加えて、Dr. Andrew も強調していた Chat GPT や Gemini をはじめとする生成 AI の台頭である。私たち大学生にとっても、かなり身近な存在になっている技術である。こうした一連のテクノロジーの進歩を説明した後、彼は私たちにこう尋ねた。What is the meaning of being human? (人間である意味とは何か)。これまで考えたことがあるようではなかった根源的な問いである。私自身人間であるのにもかかわらず、すぐさまいい答えが思いつかなかった。

答えを見つけることより、こうした問いを考えることの方が重要なのだと思う。よくよく考えてみると、私たちは経済にしろテクノロジーにしろ、今まで以上に発展することを善とし、そこに莫大な費用を投じてきた。ただ捉え方によっては、脳内チップや生成 AI のように、私たち人間がテクノロジーの進歩に追いつけていない、あるいは人間の方がテクノロジーに浸食されつつあるような印象を抱く。なぜなら、脳内チップを埋め込まれた

人間は純粋なヒトではなく、AI と人とのハーフ状態にある。また、生成 AI は使い方によっては人間の思考力を剥奪しかねないからだ。つまりは、発展や成長、利便性といった人間の進化欲が、結果として本来の人間のあるべき姿や人間らしさを曇らせている。

こうしたある種の暴走状態のなかで、今一度「人間とは何か」について掘り起こして考え直す必要がある。それは、テクノロジーが発達し、今後もますますその形が変化していく社会において、私たち人間が「人間である」という事実を見失わないようにするためであり、人がどこまでも進化していったとしても、帰ってこられる心の拠り所を築くためであるということだ。そして、「人間とは何か」を探究する学問こそ、人文科学であるということに気づいたのである。

このように、**Dr. Andrew** による授業によって、人文科学を探究する意義が今まで以上に明確になった。この気づきは、2 年次以降私が専門科目を勉強する上でのモチベーションに繋がると思う。一見、実学とは疎遠な学問に思える人文科学だが、数十年・数百年スパンで見ると、実は最も学ぶ価値のある人の核をなす学問だという気づきは、今後私をより人間味のある人へと「成長」させてくれるだろう。

(2) プログラム内容についての全体的な感想

私は海外経験が乏しく、渡米前は現地でコミュニケーションに関して不安があったのだが、いざ留学してみると予想をはるかに上回るほどの楽しさと驚き、また素敵な人たちとの出会いがそこには待ち受けていた。ここでは留学中に私が驚いた経験を一部、紹介する。

私が日本人の ASU 生と食堂で昼食を食べていた時である。にぎやかに話しながら昼食を食べていると、近くに座っていた中国人留学生が私たちに声をかけてくれた。私を日本人だと知った彼は突然、「今の石破政権についてどう思うか」と日本の政治事情について意見を求めてきた。政治の話題を振られることが今までなかった上に、政治に関する質問をドストレートに尋ねてきたことに驚きを隠せなかった。政治の話は公に語るべきではないと思いつつも、私自身、これまで日本の政治に対して無関心だったことに気づかされたため、これからは日本の政治ニュースに対して関心を持つようにしようと思った。このように、日本では経験できない非日常体験にたくさん遭遇してきたのだが、当初は日本との違いに戸惑ったものの、それらを楽しめる心の余裕を持ち続けられたのは私の強みだと思った。

異国の地に行くと文化や価値観の違いに直面する。日本で生まれ育った私にとって、衣食住に関することや授業の形式、また公共交通機関などあらゆる面で驚きの連続だった。それと同時に、私がこれまで無意識に消化していた「当たり前」が、アメリカ人から見ると当たり前ではないということに改めて気づかされた。このような私の知らない世界が海の向こうにはどこまでも続いていて、そこには多種多様な文化や伝統、言語を有する民族が存在するということを、身をもって知ることができた。10 代最後の時期に留学できたことをうれしく思うとともに、今回の START プログラムで出会ったメンバーや現

地学生、職員スタッフとのつながりをいつまでも大切にしたいと思った。

最後に、10 日という短期間の留学であったにもかかわらず、アメリカを最大限堪能でき、安心して留学できたのは、引率の先生方や個性豊かなプログラム参加メンバー、また両大学からのサポートがあったからだと思う。心から感謝申し上げるとともに、留学の素晴らしさをまだ留学経験のない若い人たちに向けても発信していきたいと思えた。

(3) 今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス

プログラム前はできる限り、その国の基礎情報やプログラム内容について予習しておくことが重要だと実感した。なぜなら、留学国の歴史的背景や文化に関する知識を備えておくことで、その場で感じた疑問や違和感に対処することができるからである。例えば、私たちがフェニックスに到着した際、道路標識や広告がやたらとスペイン語で記載されていることに疑問をもった。その時はなぜ、英語と同じくらいスペイン語表記が多いのかわからなかったのだが、調べてみるとアメリカの西・西南地域は昔、メキシコの領地だった過去があることを知った。それ加えて、アリゾナという州名もその語源はスペイン語であることが判明した。ここで「アリゾナ州にはなぜスペイン語表記が多いのか」という謎が解決した。

また、私は渡米前、アメリカ人は気さくでフレンドリー国民だというイメージを持っていた。案の定、彼らはとてもフレンドリーであり、日本人である私たちを受け入れてくれたように感じた。一方で、「アメリカ人はなぜ陽気で明るい人が多いのか」という疑問も同時に湧いてきた。アメリカの長い歴史を紐解いていくと、問いを考える上でのヒントをくれるのだと現地の ASU 日本人学生が教えてくれた。アメリカは 17 世紀のイギリスなどの西ヨーロッパから始まり、大規模な移民を受け入れてきた歴史がある。人種も文化も異なる民族と共生していくためには、外から入ってくる人々に対して、寛容にならざるを得なかった。そうでないと、異民族間で争いが生じてしまい、生き延びることができなかったからだ。つまり、アメリカ人の陽気さやフレンドリー精神といった国民特性は、もとをたどれば多民族国家における生存戦略の一つだったのである。

こういった留学先の予備知識や歴史的背景をあらかじめ学んでおくことで、違ったレンズを通して異国の地を観察することができる。それは現地の授業でも同じであり、授業内容に関する事前知識を身に付けておくだけで、すんなりと教授の言っていることが理解できるようになる。現地での学びを最大化するためにも、留学前にある程度、留学先の歴史や現地で受ける授業内容に関する予習をしておくことをお勧めする。